

# 許六『追善註千句』翻刻と略注(六)

牧 藍 子

本稿は、「許六『追善註千句』翻刻と略注(五)」(『成蹊人文研究』第三二号、令和五年三月刊)の前稿を継ぐものである。

## 【凡例】

- 一、句頭に番号を付した。
  - 一、本文の行移りは原本とは一致しない。
  - 一、振り仮名・送り仮名・濁点は全て底本のままとし、句読点などは私に付した。明らかに誤字と認められる文字には(ママ)と傍注した。
- 略注の中で引用する文献については、私に濁点・句読点等を付した。
- 一、漢字は原則として現行の字体に改めたが、一部そのままとした。
  - 一、片仮名は「ハ」「ミ」など、変体仮名と認められるものは平仮名に改めたが、小文字で記されたものなど一部そのままとした。
  - 一、仮名・漢字のおどり字「ヽ」、「ヾ」「〳」はそのままとした。

- 一、※に逸丸筆写本に関する注記を示した。
- △に林篁筆写専宗寺旧藏影写本との校異を示した。
- ◎に句の季などを示した。
- に略注を示した。

## 【翻刻・略注】

### 註千句

#### 第六

#### 1 夕食も盆の急きや墓参

凡骨を離れたる人、こゝに至る。

△「参」<sup>イ</sup>「凡骨」

◎盆・墓参(秋)

○盆 祖霊を迎えて祭る年中行事。近世には七月一三日から一六日までを盂蘭盆とし、一三日には迎火として芋殻<sup>おが</sup>をたき、聖霊棚を

作って、そうめん・枝豆・ささげ・根芋・瓜・茄子などを供え、僧

を招いて棚経を読み、墓参をする。一六日には送火をたいて精霊送りをした。○墓参 『増山井』(寛文七・一六六七年刊)『俳諧をだま

き』(元禄四・一六九一年刊)『誹諧新式』(元禄一一年刊)に七月と載るが、『通俗志』(享保二・一七一七年序)では雑とされる。また

『滑稽雑談』(正徳三・一七二三年序)巻二三「秋之部」の「墓詣」の項に「和俗、七月に入て先祖の墳墓を祭る事、釈氏の教に拠あるか。

然ば当月十三日より十五日に至て、墓詣をなすべし。京都には朔日比より是を行ふ。是盆前に至て、商売の世業に暇をおしみて、前広

に墓へ参るならし。東西の余国は、武家・町人によらず、十四日・五日・六日に勤る也。古来は「墓詣」と計は秋に成がたし。当世は

「盆供」に通じ用ゆ。作者心得べし。」(『滑稽雑談 第二 増訂版』国書刊行会、一九二二年)とある。

## 2 昼の暑さの残る秋の日

△「あつさの」

◎秋の日・暑さの残る(秋)

○秋の日 秋の一日。昼の長さが次第に短くなり、あわただしく暮れるので、「つるべ落し」などといわれる。

## 3 京田舎思ひ／＼の月見して

仲秋の比、いまた暑し。

◎月見(秋)

## 4 新酒の臭かさに初はつ廠ぢやうの声

時節を可感。

△「声」は「こゑ」の誤記を抹消した上、右傍に補記。

◎新酒・初はつ廠ぢやう(秋)

○新酒 その年の新米で作った酒。○初はつ廠ぢやう 秋、その年はじめて北方から飛来する雁。

## 5 手覚えの小反こりにそつた旅刀

△「手覚え」

○手覚え 武芸などの技術に修練を積み、自信のあること。○小

反 反りの小さいこと。ここは旅刀の刀身が短く、自ずと反りが小さいことをいうか。○旅刀 江戸時代、武士以外の者も、旅行時には護身用の脇差を指すことが許されており、その道中差をいう。武

士は大小(刀・脇差)二本指すことが許されていたのに対し、道中差は長さ二尺前後のものを一本だけ差す。前句を新酒を作る里を詠

んだものとみて、近くを通りかかった旅人のさまを付けた。「秋風にふかれて赤し鳥の足 酒堂／＼臥てしらし稲の穂の泥 諷竹／駕籠

かきも新酒の里を過兼て ばせを」(『柴橋』(元禄一五年序)所収

「秋風に」三句)

## 6 下荷付れは渡す跡付

旅籠屋の朝立。

○下荷 馬などの積荷のうち、下になるように積んだもの。○跡付 人や荷物を乗せた馬の尻につけた荷物。武士の旅では、多く刀箱を跡付けにした。

## 7 行灯に障子しらけて明ヶ残り

○しらけて しらじらと明るくなる。しらむ。○明ヶ残り まだすつかり夜が明けきららないさま。早朝の旅立ちという動きのある場面を詠んだ前句に対し、同じ時間帯の静かな室内の様子を対照的に付ける。

## 8 急かぬ雲の峯にはなる、

朝けしき。

○峯にはなる、和歌では「峰を離るる」が普通であるが、武者小路実陰（一六六一〜一七三八）の家集『芳雲集』に「降るとみし時雨に風やきはふらん夕日ぞ雲の嶺にはなるる」（二六七三）と詠まれた例がある。

ウ

## 9 十月は会式の旅も打ましり

身延、鎌倉の旅。

◎十月・会式（冬）

○会式 法会の儀式のこともいうが、ここは日蓮宗で、日蓮の忌日

の一〇月一三日に行われる法会を指す。通常御会式、御命講・御影講とも呼ばれる。江戸では、一〇月に入ると会式の万灯に飾る造花が売られた。特に日蓮寂滅の地である池上本門寺（東京都大田区）の会式が有名で、万灯を担いだ多数の群参者で雑踏を極めた。○身延 山梨県南巨摩郡身延町。北方の身延山にある久遠寺は日蓮宗の総本山で、日蓮が晩年の文永十一年（一一七四）、この山中に草庵を構えた日を開闢とする。『和漢三才図会』巻六九「地部」の「身延山久遠寺」の項に、「文永十一年五月、上人鎌倉を出で、甲州に到る。三郷の領主、南部六郎源実長と云者有り。聞法帰依して大檀那と為り、寺を建つ。上人遷化し七回忌の後、日向上人、蒲山大伽藍と為す。」（原文の返り点、送り仮名にしたがって私に書き下した）とある。江戸時代には、本山に参詣するための身延講・題目講が結ばれた。○鎌倉 日蓮は文永八年、五〇歳のとき佐渡に流され、晩年は身延山に隠棲するが、それまでは鎌倉を本拠として布教活動を行っており、縁の地である。

## 10 大根洗ひに濁る六郷

◎大根（冬）

○大根 近世前期諸歳時記に「大根引」が一〇月、『通俗志』には「大根」が三冬と載る。ここは収穫した大根を洗うとみて冬の句ととる。○六郷 武蔵国の玉川（現在の多摩川）の最下流を六郷川と呼

び、その北岸の広い地域を六郷という。『和漢三才図会』巻六七「地部」の「玉川」の項に、「俗に太婆加波」池上の北より出でて、六江（矢口の渡し）に落つ。」と見える。六郷は東海道が多摩川を横切る重要な地点で、徳川家康が六郷大橋を架けさせたが洪水で流失、元禄四年以降は船渡しとなっていた（森川昭『東海道五十三次の事典』三省堂、一九八九年）。

## 11 御鷹場の上をのし行鶴の声

六郷は、武蔵の多摩川の末なり。矢口の渡しも此川筋にあり。此あたり御留場なり。

△「末也」「御留場也」

○御鷹場 権勢のある家や領主が鷹狩をする場所。一般の入猟は許されていなかった。○のし行 「のす」は遠くまで行く、の意で、鶴が鷹場を越えて遠く飛んでゆくさまを表現する。○矢口の渡し 多摩川下流の古鎌倉街道の渡船場。現在の東京都大田区矢口三丁目と神奈川県川崎市幸区東古市場を結ぶ。新田義興が鎌倉方に謀られて、この渡しで自決したとされるが、多摩川はたびたび流路を変えており、それにもなつて渡しの位置も変わっている。近世には、風来山人（平賀源内）が『太平記』巻三三「新田義興自害の事」をもとに「神靈矢口渡」（明和七・一七七〇年一月初演）を著して以来、江戸近郊の名所として賑わった。なお、現在の東京都稲城市矢野口の付近を矢口の渡しとする説もあるが、近世にはその説は唱えられてい

ない。○御留場 江戸時代、一般の狩猟が禁止された場所。

## 12 五表ならしの民の世の中

秋のことはなけれど、打込たる秋なり。

△「秋季の詞」「秋也」

◎句意から秋。

○五表ならし 平均五俵。一俵は俵詰め一つ分で、近世の年貢米は三斗五升入り（約六三リットル、重さ約五二・五キログラム）を標準とした。五俵は一石七斗五升。一人扶持は一日玄米五合、一か月一斗五升を標準としたことから考え、ここは十分な量の米が収穫できたことをいう。○民の世の中 「民」は租税を納める人民のことで、民にとってありがたい世の中である、という意。○打込たる秋 「打ち込む」には「自動詞的に用いて、無秩序に入り交じる。雑然と集ってひしめき合う。」（『角川古語大辞典』）という意味があることから、ここは一句全体から総合的に判断して秋の句になることをいう。

## 13 夜通しに蔵の地搗ツキの秋の手間

田家の屋普請、大方地つきは夜なり。

△「夜也」

◎秋（秋）

○地搗 家屋普請などのときに、土台の部分の地面を搗き固めること。二〇人ほどが搗き手となって、地搗歌を歌って音頭をとりなが

ら、力を合わせて作業を行った。前句の豊作のさまを受け、収穫頃の村の共同作業として蔵普請を思い寄せた。

#### 14 月下にた、く細美盗人

近江路、賈嶋か詩の倂。

△「詩」

◎月（秋）

○細美 たて糸・横糸ともに太い糸で、目をあらく平織りにした布。細布のこと。『守貞謄稿』卷一三「細布」や後集卷四「上刺囊」の記述によると、麻製の粗布のことで、武家の奴僕の夏服に用いたほか、酒漉しや豆腐漉しの袋、夏の暖簾や風呂敷にも作られたという。『毛吹草』巻四に「近江」の名産として「細美衣地」が載り、「さいみ」「さよみ」と読むのが一般的で、「コワリ」の読みは未詳。○賈嶋か詩の倂 賈嶋は中唐の詩人。「僧は推す月下の門」という自作の詩句について「推す」とするか「敲く」とするか悩んでいると、韓愈の行列にぶつかり、韓愈の意見で「推す」を「敲く」に改めたという故事で有名。この故事では「敲く」としたことによって、月の風情に動かされた不意の来訪であることが表現されるが、この句では内に人がいるかどうか確かめる盗人の動作に転じられている点が滑稽である。

#### 15 近江のやひとり嬢も住よくて

こわり、芋がせに作業やすし。

○近江のや 「近江の」と同意で、「や」は語調を整える間投助詞。「石見のや」「淡海のや」など、特に『万葉集』に多い語法である。○嬢 独身の者。前句から、一人気ままに生活する風流な人物が想起されている。○芋がせ 芋柀おがせ（麻柀）。麻をひねりつないだものによつて糸にし、柀（木製の柀）にかけて輪にしたもの。またその柀のこと。注は、細美を織るのに芋柀が作業しやすいとの意で、悠々自適に暮らしている独身者の手業の説明となっている。

#### 16 有難事の絶ぬ寺く

○有難事 ありがたきこと。神仏のもたらした感謝すべき珍しいこと。

#### 17 焼跡も元のことくに建広け

是は京也。正月は円光大師五百年忌、三月は東西本願寺

親鸞上人四百五十年忌の取越、其さき天道次第。

○焼跡 注に「是は京也」とある通り、宝永五年（一七〇八）三月八日に京都で起きた、いわゆる宝永の大火のこと。この大火で、禁裏御所・仙洞御所・女院御所が炎上したほか、公家の邸宅や寺院・町屋など、上京を中心に広い地域が焼亡した。この大火後、公家町を拡充するため、一部の町家や寺院は郊外に移転させられ、西は内野、東は

鴨川の東側まで市街地が拡大したという(鎌田道隆「近世都市における都市開発―宝永五年京都大火後の新地形成をめぐって―」『奈良史学』一四号、一九九六年二月)。○円光大師 法然(一一三三―一一二二)のこと。『武江年表』の正徳元年正月二五日の条に「円光大師五百年忌なり」と見える。なお、本千句には宝永七年一〇月二日付の自序が付されていることから、この翌年正月に予定されていた行事ということになる。○親鸞上人 親鸞(一一七三―一二六二)。

○天道 天の意思。

### 18 金剛はかねはならぬ人並

京都の奢、下女半女<sup>ウツメ</sup>まで、高直のこんかうをはく。むかしなきこと也。

△「半女」「事也」

○金剛 金剛草履で、丈夫な作りの草履。本来菅<sup>すげ</sup>で作るとされ、藁<sup>わら</sup>で作ると藁金剛、藁の場合は藁金剛などと呼ばれる。『雍州府志』巻七「土産門下」の「草履」の項に「一説に、其の製法、堅密にして、遠方に行くといへども損せず。故に俗に金剛と謂ふ。」とあるように、堅固であることから金剛と称するという説のほか、平安時代前期の天台宗の僧安然が、金剛杵を手もって草履を作って売ったという伝説が諸書に伝えられる。『昨日は今日の物語』下巻に「じゆらくにて、こんごう大夫、くはんじんのふにしばいせん三十文づ、取れば、こんごうは二そく三文する物を三十とるはせきだ大夫か」

(濁点は私に付した) などとあることから、金剛草履全般が高級品というわけではなく、むしろ安価なものであったことがうかがえる。○人並 世間並み。

### 19 出替の間をねらふ子さし宿

下女躰。

◎出替(春)

○出替 奉公人のうち、一年または半年契約の者が、その期間を終えて入れ替わること。また、その日。古くは二月二日と八月二日と定められていたが、寛文九年からは三月五日と九月五日に行うべき旨の布令が出され、時代や地域によつて、これらの日を基準としつつそれぞれの日取りで行われた。八、九月の出替りを後の出替り、秋の出替りともいう。ここは一連の春季の旬のなかにあるため春の出替り。○子さし宿 熟した語ではない。墮胎を業とする女性を「子刺婆<sup>こさしや</sup>」ということから、ここは奉公先で妊娠した下女が、墮胎して新しい奉公先に移ることを詠むと考えたい。

### 20 屏風にかける裔の小桜

小さくらはすそもやうにして、春のあしらひ。

△「あしらひ」

◎小桜(春)

○裔の小桜 「裔」は「すそ」と読む。「小桜」は小さい桜の花を散

らした文様のこと。鎧の小桜威をはじめ、多く革や布の染め模様として用いられる。こは、屏風に掛けられた小袖の裾の模様。○春のあしらひ 小桜という言葉が、小袖の模様を意味すると同時に、前句の春季にふさわしいものとして配されていることをいう。

## 21 いかめしき赤弁当の花さかり

桜に花、習あり。口伝。小袖、幕也。

△「花盛」

◎花さかり（春）

○いかめしき 豪華なさま。ものものしさも感じさせる。○赤弁当 朱塗りの弁当箱。時代は下るが、紀州藩の藩校学習館の学長であった川合梅所の妻小梅が記した『小梅日記』の万延二年（一八六二）五月二八日条に「八つ比より学校へ行。詩文会にて行。一ひやうと赤弁当へゑび少々持行。」という記事が見える。本句は、朱塗りの器に詰められた豪華な花見弁当が、満開の桜に負けず劣らず華やかであるさまを詠む。○桜に花 「桜」の前句に「花」を付けることに関しては、特別な場合として口伝がある。「小袖、幕也」とは、前句からの付筋を説明したもので、前句の小桜模様の小袖から、花見幕を連想したということ。

## 22 豆腐の時に生れ逢ふ春

近代、京も田舎も上手の豆腐あり。

△「アリ」

◎春（春）

○豆腐の時 豆腐のもてはやされている時代。遠藤元男・谷口歌子『日本史小百科16 飲食』（近藤出版社、一九八三年）「豆腐」「田楽」の項目によると、豆腐は奈良時代に遣唐僧によって日本にもたらされ、鎌倉時代には禅寺の日常食品とされたが、庶民の食生活にまで広まったのは、挽臼が普及した江戸時代になってからであるという。また同書には、東海道の石部と草津の間にある目川村の菜飯田楽や、江戸浅草寺門前の田楽、真崎稲荷の田楽、京都の祇園豆腐等が名物として挙げられており、庶民に愛好されたことがうかがえる。なお、『守貞謄稿』後集卷一「豆腐」には、「昔は堺を名物とせしか。今制は人これを賞さず。今制、京坂、柔らかにて色白く味美なり。江戸、剛くして色潔白ならず、味劣れり。」とある。○生れ逢ふ 同じ時代に生まれ合わせる。○上手 名人。

二

## 23 君か代をゆたかにあふく洪団

◎洪団（夏）

○洪団 表面に柿渋を塗った丈夫で質素な作りの団扇。貧乏神が持つとされ、これがおがれると貧乏になるという俗説がある。前句の豆腐が庶民的な食べ物であることや、「生れ逢う春」という言葉のニュアンスを受けて、貧しいながらも平穏な日々を送ることができ

る世に生まれたことを言祝ぐ句を付けた。

## 24 疝氣涼ます店の腰懸

◎涼ます(夏)

◎疝氣 下腹部に痛みを感じる病氣。今日の医学でいう疝痛(腹部臓器の疼痛)を主な症状とする疾患を一括して呼ぶ。◎腰懸 腰掛の台で、数人が掛けられるように長い板の両端に足を付けたもの。茶店などで用いられた。

## 25 撰喰に糸屋の亭主恋をして

京なり。

◎恋(恋)

◎撰喰 選り好みをする事。「煎り豆の選り食い」「山桃の選り食い」など、はじめはよさそうなものから選んで食べるが、少なくなるにつれて選り好みをしなくなることとをたとえたことわざにも用いられる。ここは、糸屋の亭主が次々に店の売り子にちよっかいを出す事。◎糸屋 糸類を売る店で、京都の小川通り一条上ル付近の店が有名。売り子は売色をする者も多かった。

## 26 こけて火燧に憤寝の夢

◎こけて(恋)

◎こけて 「こく」は転ぶ意であるが、前句をふまえ、ここはほれる

の意も効かせるか。◎憤寝 怒って寝てしまうこと。熟した語ではない。

## 27 養生に夜食扣へてないといふ

おこりねはわらへなり。一句しまらぬ所、作者自慢とす。

△「わらべ也」

◎養生 健康に気をつけること。◎扣へて ひかえて。ここは子どもに食べさせまいとすること。前句を子どものさまに見変えて、その理由を付けた。

## 28 雪駄かなつて戻る父親

前句わらへの噂にして、子といふ字なし。父おや、前句

の噂にあらず。

△「鳴て」

◎雪駄 竹皮草履の裏に革をはったもの。丈夫で湿気が通らないようにしたのが特徴。元禄(一六八八―一七〇四)以降、革が減るのを防ぐため、かかとに尻鉄(しりかて)(「ちゃらかね」という)を打つのが流行した。ここは尻鉄の音で父親の帰宅を知る。「親かたより、はやり衣装の仕出し、素足に雪踏の音たかく、禿も鼻紙めに立ほど入て、内のよろしきにや」(『好色盛衰記』(貞享五・一六八八年刊) 卷二の四「難波の冬は火桶大臣」)。◎前句の噂 付句が前句の説明となり、句想が同意となった付け方を噂付といい、蕉風で避けるべきものと



された。

## 29 友達のごそくはつす箱階子

◎句意から恋。

○箱階子 それぞれの段の下部の空間に、側面から利用する引き出しや戸棚を設けた階段。可動式で不用のときは取り外し、たんすのように用いた。ここは遊郭に父親が乗り込んだところを、友達が氣を利かせてはしこを取り外す場面。

## 30 湿粉かすめは日待明行

湿粉シルコ

○湿粉 和菓子メーカー「とらや」のホームページ「和菓子だより魅力を探る 湿粉製「八重霞」」(<https://www.toraya-group.co.jp/corporate/bunko/activity/bunko-activity-yomoyama2003-17>)の解説中に、「湿粉」の説明として「餡と糯粉・上新粉を混ぜてもみ、こし網で濾してそぼろを作り、枠に入れ蒸したものとあるが、ここはそれではなく「汁粉」のこと。「汁粉」は、小豆あんを水でのばして砂糖を加えて煮て、餅や白玉団子などを入れたものである。日待に汁粉を食している例としては、近松門左衛門「心中万年草」の冒頭の場面に「おと、ひのお日待に、法印様のしやうばんで、ぜんざいもちを十三ばい」とある。○日待 一定の日に一定の場所に講を結んだ人々が寄り合い、日の出を待って拝み祭る行事。室町時代から民間で行われた。本来は神事であったが、近世になると神事とし

ての性格はうすれて遊興を目的とした行事となり、眠気を覚ますため、浄瑠璃・説経・三味線・浄土双六・手相撲・福引など、さまざま遊びが行われた。

## 31 ちりくりに朗の雲の朝烏

ほらけは朝ほらけ也。

△「ほらけは」

○朝烏 朝に鳴く鳥。また、朝が近いのを告げるように鳴く鳥。

## 32 火皿合せて馬士の吞除

火皿はきせる也。股ひろになるは、ありき小便の支度也。

○火皿 煙管の先端の、刻み煙草を詰める椀型の金属部分。馬士たちが火鉢に集まって煙草を吸い、朝の出発の前にみな一斉に火皿の灰を落とすさま。○股ひろ 股を広げ気味に歩くことか。

## 33 降つゞく田毎の瀧の落し水

段々の山田より水の落るをいふ。田毎の瀧は田毎の月の佛。

信濃にあり。

△「降つゞく」

○山田 山の傾斜地にある、小さく区切られた数多くの水田のこと。  
○落し水 秋、稲が実る前に、畦の水口を切って、いらなくなつた田の水を流すこと。ただし、ここは降り続く雨によってあふれた水

が流れ出る様子 of 比喩なので、秋季にはならない。○田毎の月 信濃国更級 of 姨捨山 of 山腹にある小さな田の一つ一つに映る月をいう。

### 34 茨の花の眠る片岸

雨中。

#### ◎茨の花(夏)

○茨 とげのある低木類 of 総称。カラタチ、バラなど、多くやぶのように茂るものをいう。「道のべのいばらの花 of 白妙にいろはへまさる夏 of よの月」(拳白集・五八一)や「寺にかへればすはる麦食 翁(芭蕉) / 雨すぎて白々咲たる茨の花 邦(史邦)」(里圃編『翁草』(元禄九年刊) 所収「朝顔や」歌仙)のように、その白さが詠まれる。

○片岸 片側が切り立った崖になった場所。

### 35 ほと、きす一日鳴いて夕月夜

此句は日 of 長き句なり。朝の事を忘る、比なり。

#### △「鳴て」「句也」「比也」

#### ◎ほと、きす(夏)

○ほと、きす ホトトギス科 of 鳥。山野に生息し、初夏から里近くにも出て、昼夜を分かつたず鳴く。鶯と並び初音という語でその声が賞美され、待つことが詠まれる。○夕月夜 夕方に出ている月。陰曆一〇日頃までの上弦の月。季語としては秋だが、ここは前後が秋の句ではないので、「ほととぎす」で夏 of 句ととる。

### 36 横から這入ル泊瀬の観音

所々の観音堂、おほく横から這入ル。舞台ある故か。

○泊瀬 大和国磯城郡初瀬(奈良県桜井市内)。長谷寺があり、平安時代から観音信仰が盛んである。観音堂は、補陀落山上に観音菩薩が出現したという「観音経」の所説に基づき、多く山上の切り立った崖の上に作られたため、清水寺本堂や長谷寺本堂など、前面あるいは周囲を高い縁柱によって支える舞台造(懸造) が用いられた。長谷寺では、南側の崖に面してせり出すように礼堂が設けられ、東西に通う相の間をはさんで反対側に本堂がある造りのため、礼堂・本堂へは横から入るかっこうになる。

二ウ

### 37 腫足を引すりかねて女子旅

あはれなる女巡礼。大貳、玉かつらの君を具して、都より四日かゝりたる跣参の佛もあるへし。

#### △「大」ルビなし。「君と」

○大貳 『源氏物語』玉蔓巻で、筑紫で成長した夕顔 of 遣児玉蔓と、玉蔓に仕える三条は長谷寺に詣で、そこで夕顔 of 女房であった右近と再会する。その際、三条は右近に「大貳 of 御館の上 of、清水 of 御寺 of 観世音寺に参りたまひし勢ひは、帝 of 行幸にやは劣れる」(『源氏物語湖月抄』)と、大宰大貳 of 正妻 of 清水寺参詣 of さまが、帝 of 行幸にも劣らないほど立派であった、と大宰府 of の見聞を語る。ここ

はこの場面をふまえる。「大式」とある部分は、正しくは「三条」とあるべきところ。○蹴参 神仏に特別な願を懸けてはだして参詣すること。玉蔓巻で、玉鬘は肥後の豪族である大夫監たうろうけんからの強引な求婚を避けるため上京するが、何のあてもなく、途方にくれて長谷寺に参詣する。その場面では「ことさらに徒歩よりと定めたり。ならはぬ心地に、いとわびしく苦しけれど、人の言ふまゝに、物もおほえて歩みたまふ。」とあえて徒歩で参詣することを志し、難渋するさまが記される。○都より四日 玉蔓巻に「からうじて椿市といふ所に、四日といふ巳の時ばかりに、生ける心地もせで行き着きたまへり。」とある。椿市は大和国城上郡三輪山南麓にある地で、長谷寺からは五キロ程度の距離にある。『枕草子』一四段に「つばいちは、やまにあまたあるなかに、長谷寺にまうづる人の、かならずそこにとゞまりければ、観音の御ゑんあるにやと、心ことなるなり」（『枕草子春曙抄』）とあるように、長谷寺へ参詣する人が宿をとる場所としてにぎわった。

### 38 こぼれた錢を起す大母指ヲヤユビ

物もらひ鉢。

△「大母指」もらひ

○物もらひ 人に食物や金銭をもらつて生活する乞食のこと。家々を回り歩いて食を乞い求める場合もあるが、ここは社寺の賽銭を拾い集める様子。地面に落ちた錢を拾う際に、まずは親指で錢を起こ

してから拾い上げるさまを細かくとらえた句。

### 39 ひか／＼と拭ひたてたる板の上

○ひか／＼ 光り輝くさま。つやがあるさま。のちに「びかびか」に転じる。○拭ひたてたる 「たつ」は補助動詞として用いられ、さかんに…する、しきりに…するの意。前句を受けて、錢が落ちていく場所は、びかびかに磨かれた板敷きの上であると付けた。

### 40 油盞ツキ出す箱の毎晩

京の句。

○油盞 油皿。灯用油を注ぐ素焼きの小さい皿状の器で、これに灯心を置いて火をつける。取り外しのできるものや、燭台の上部に取り付けた金属製のものもあった。「あぶらつき」とも。○箱 三味線の箱のことで、三味線、またそれをひく芸者のことという。ここは、三味線をひく芸者の日課を詠むか。

### 41 細長うくゞりの形ナリに月さして

繩手祇園町のくゞり、別而細長し。

◎月（秋）

○繩手 京都市東山区、鴨川の東を南北に通る大和大路通のうち、三条と四条の間の通称。四条付近は祇園新地の外六町のうちで、芸妓・仲居を抱える置屋や、遊び場である茶屋が集まっていた。○祇

園町 祇園社の西にある町で、祇園新地の中心をなす。元禄時代から色茶屋があり、初めは島原に対して格下の私娼街であったが、島原が衰退するにしがって活気を呈し、近世中期には京都最大の花柳街となった。○くゞり 潜戸くぐりどの略。表戸の下部に仕組まれた小さな戸のことで、表戸を閉めた後の出入りに用いる。

#### 42 竈イト馬の声にちらす鍛冶の火

△「声」の右に「声トアリ」と傍記。

#### ○竈馬 (秋)

○竈馬 「かまどうま」の異称。体長二ないし二・五センチメートル、体は湾曲し、触角と後肢が特に長い。体色は茶褐色。床下や土間の隅などしめった場所に生息する。古来「いとど鳴く」といわれ、鳴き声を詠んだ句もあるが、発声器官である翅が退化しているため鳴くことはない。○鍛冶の火 鍛冶屋が金属を打ち鍛えるときに出る火花。

#### 43 朝露を払ふて殿の寺参

御寺参の道筋、鍛冶屋の朝起を褒ほめ給ふ咄あり。

#### ○朝露 (秋)

○朝起 早起きのこと。『冬の日』「炭売の」巻に「寅の日の旦あしたを鍛冶との急と起とて 芭蕉／雲かうばしき南京の地 羽笠」とあり、本千句の第七百韻に載る「秋寒き朝糞取に鳴鴉／鍛冶屋は起て明々残る月」

の付合には、「鍛冶屋、朝起する第一也。」と注が付される。貴人が鍛冶屋の早起きを褒めた話については未詳。

#### 44 海から直にしぶく松風

大門さき、しぶくは降物もあるへし。

○大門さき 現在の石巻市湊大門崎。牧山南西麓に位置し、延喜式内社零羊崎神社の登り口の一つにあたる。往古は波打際に屹立する岬であったための地名かともされる。大門崎から牧山を約二〇〇メートルのぼった地点にある平地は、天台宗経王山法泉寺跡と伝えられる。宝泉寺は、江戸の上野寛永寺門主解脫院宮一品親王(後西天皇第五皇子)の隠棲の地として牧山が選定されたことから、元禄八年に建立されたが、解脫院宮は翌九年の落慶前に死去した(『日本歴史地名大系 宮城県』「大門崎」)。前句の殿を解脫院宮と見た連想かとも思われるが、解脫院宮の没年は元禄三年で、『日本歴史地名大系』の記述ともかみ合わない。○しぶく 雨風や波が激しく吹きつけること。○降物 ふりもの。連俳用語で、雨・雪・露・霜・霰など自然現象のうち空から降ってくるものを指している。三句以上隔てて詠む(三句去)のが決まり。

#### 45 敦盛の五輪限りの須戸の果

敦盛の五輪は三の谷にあり。

○敦盛の五輪 一ノ谷の戦いで源氏方の熊谷直実に討たれた平敦盛

の供養塔。現在神戸市須磨区にあり、敦盛塚と呼ばれる。五輪は、密教における五輪観に基づいて、方(地)・円(水)・三角(火)・半月(風)・宝珠(空)の形を石などでかたどり、下から順に積み上げ、それぞれに五大の種字(しゅじ)を刻み込んだ塔のこと。○三の谷 摂津国六甲山地南西端にある鉄(てつ)揚山・鉢(はち)伏山の、海に面した南東急斜面に一ノ谷があり、そこから西に二ノ谷、三ノ谷がある。

#### 46 ひつついて来る乗懸の鐘

西国海道、人通り希なる所也。

○ひつついて びつたりと付く。密着する。鐘持がそば近く付き従うさま。鐘持は、武士の外出時に鐘を持って従う下僕で、百石以上の土は鐘持一人を従えることができた。○乗懸 腹の両側に一〇貫目ずつの明荷という葛籠を二個つけ、旅人一人を乗せて運ぶ駄馬を乗懸馬といい、ここはそれに乗ること。人一人に荷物二〇貫目(約七五キログラム)をつけるとおよそ四〇貫目になるため、駄賃は上限積載量四〇貫目の本馬と同じであった。○西国海道 京から中国・九州方面に向う街道の称。西宮で中国街道と合流する。

#### 47 煙立ッ泊の宿の屋ねみえて

△「宿」音読譜号なし。「見へて」

○煙立ッ かまどから立ちのぼる炊事の煙。

#### 48 持こたへたるけふの雨空

○持こたへたる なんとか天気を持って、雨に降られずに済んだということ。

#### 49 足弱のましりて戻る花の暮

足弱は女子ともなり。

△「子共也」

◎花の暮(春)

○足弱 足が丈夫でない人。婦人・子ども・老人など。○花の暮 花の咲いている頃の夕暮れ。また、花の季節が終ろうとする頃。ここは前者で花見帰りのさま。

#### 50 寺町通霞む晩鐘

◎霞む(春)

○寺町通 北の鞍馬口通から南の五条通まで、京都市街地を南北に走る街路の名。○霞む 霞がかかる。「霞」と「鐘の音」は付合(『類船集』)。また『俳諧御傘』(慶安四・一六五二年刊)には「鐘かすむ 夜分にあらず。春也。(中略) 此かすむ、めに見る霞にあらず。声の、春は長閑にてかすむと云事也。夜は陰分なれば、春とてもかねの声かすまぬ物也。」とある。

三

51 幾春か銅の大鶴売<sup>か</sup>かねて

寺町三条の辺、から物の鶴あり。何十年の棚さらしやらん、しらす。一たひ上洛<sup>か</sup>人、是をしらすと云事なし。

△「いふ事」

◎春(春)

○寺町三条 前句の「寺町通」から、具体的な店先の商品に着眼した。京都七口(街道の出入口)の一つである粟田口は、三条口・東三条口とも呼ばれ、東海道・中山道から三条通への出入口となっていた。○から物 中国から渡来した品物。唐錦・唐織物など舶来品の総称で、それらを模し日本で作ったものをも含めていう。これを商う店を唐物屋といった。

52 祖父の年忌をとふて日出度<sup>キ</sup>

打越、大難所也。此句、前句に付ず。是を上手のやり句といふ。下手等<sup>つ</sup>及ぬ所也。

△「付す」

○年忌 年ごとにめぐってくる死者の忌日(祥月命日)、またその日に行う法要。一年目を一周忌、二年目を三回忌(三年忌)、六年目を七回忌といい、一三回忌・一七回忌・二五回忌・三三回忌・三七回忌・五回忌・百回忌などを行う。○大難所 句を付けにくい場所のこと。前句の「銅の大鶴」が仏具であることから仏事を付けようと

すると、打越の「寺」に指合となることをいうか。

53 禪に入<sup>ル</sup>播<sup>ル</sup>戸の灘屋剃<sup>ツリ</sup>下地

盤桂和尚を帰依僧とす。灘やはかくれなき分限者也。

△「剃」<sup>ス</sup>「灘屋は」

○帰依僧 仏教を信仰する人が尊敬して随従する僧。灘屋が盤桂和尚に帰依したことをいう。○盤桂和尚 盤珪永琢(一二六二—一六九三)。臨済宗の僧。播磨国揖西郡浜田村(兵庫県姫路市網干)の出身。備前三友寺の牧翁の法を継ぎ、二六歳のとき大悟した。のち各地を遍歴して、郷里網干の龍門寺をはじめ諸寺を創建し、平戸藩主松浦鎮信<sup>しげのぶ</sup>、大洲藩主加藤泰興、丸亀藩主京極高豊ら、諸大名のうちにも帰依する者が多かった。人は生まれながらにして不生不滅の仏心をもつという「不生禪<sup>ふしょうぜん</sup>」を唱え、難解な禪を庶民にも理解できるように説いた。○灘屋 現在の姫路市網干区浜田にあった北国廻船問屋で、立野藩御用を勤めた。『網干町史』(網引町史刊行会、一九五一年)第六章「船舶」には「灘屋」の項目が設けられ、天正の頃から廻漕業を営んで巨富を築いており、元禄の頃の当主は甚左衛門道珠であったことが記される。同書によると、灘屋は盤珪禪師の生家の隣にあり、甚左衛門の兄道弥は盤珪の三歳年下で幼時から親しく、道珠も兄とともに龍門寺創建を援助したという。また道珠は杉木普齋に千家の茶道を学び、茶人としても有名。なお『日本永代蔵』巻五の五「三匁五分曙のかね」に「幡州の網干に姨有しが、此

許に遣はし置、那波屋殿と云分限を見ならへと」とある「那波屋」は、この灘屋をもじったものとされる。○剃下地 灘屋が盤桂和尚と同じく綱干出身であることが、禪の道に入る機縁となったということ。

#### 54 生れ娘の姫こしらへ

生(マユ)の日、桐の木を植るためしあり。

△「出生の日」

◎姫(恋)

○生れ娘 ここは生まれたばかりの娘。○桐 ゴマノハグサ科の落葉高木。材質は軽く軟らかで、木理が美しく、防湿・防虫の性質があるので、箱や箆笥などを作るのに良材とされる。娘が生まれたら桐の木を植える習慣については、『和漢三才図会』巻八三「喬木類」「桐」の項に、「最も長じ易く、幼女有る家は之を栽ふべし。当に嫁(よめいり)すべきの頃には、則ち宜しく櫃板に作るべし」とある。なお、本句の注は次句への付筋を説明したものだ。

#### 55 堀うらは桐の一葉に秋立て

◎桐の一葉・秋立て(秋)

○堀うら 堀の内側。特に城や大きな屋敷の場合に用いられる例が多い。○桐の一葉 初秋に桐の一葉が散るのを見て、秋の到来を知ること。「淮南子」巻一六「説山訓」に「一葉の落つるを見て、歳の将に暮れなるとするを知る」といわれるのはアオイ科のアオギリで、

キリの仲間ではないが、これと混同して凋落の秋を象徴するものとして詠まれる。○秋立 秋になる。

#### 56 伊駒に尖る淀の三日月

△「尖る」

◎三日月(秋)

○生駒 生駒山。現在の奈良県生駒市にあり、標高は六二四メートル。大和と河内の境に位置する歌枕で、交通の要所でもあった。和歌では、「君があたり見つつも居らむ生駒山雲なかくしそ雨はふるとも」(『伊勢物語』二三段)以降、歌枕として広く知られるようになる。○淀 京都市伏見区南西部の地名。宇治川・桂川・旧木津川の三川の合流点にあたる。宇治川の北の納所には淀君の淀城があったが、元和九年(一六三三)松平定綱が宇治川をはさんだ対岸に新城を築城し、以降は淀藩の城下町、また東海道の淀宿として繁栄した。ここは淀から生駒山の方を見上げた景。

#### 57 露霜の篷に首出す下り船

◎露霜(秋)

○露霜 秋から冬にかけて置く露や霜。また、晩秋に降りた露が凍って薄い霜になったもの。淡くて消えやすい秋の霜を指すこともある。○篷 とま。菅、茅(かや)などを菰(むぎ)のように編んで、小屋の屋根や周囲、船のおおいなどに使用したもの。○下り船 川を下る船。特

に伏見または淀から大阪まで淀川を下った乗り合い船をいい、ここでは前句から後者が連想されているよう。『人倫訓蒙図彙』卷三の「伏見下り船」に「伏見より大坂にくだる道、行程十三里を只一夜に寝て行は、最やすきなり。」とあり、伏見を五つ（午後八時頃）、淀を四つより九つまで（午後一〇時頃から午前零時頃まで）の間に出発する船があったことが記される。また『守貞謄稿』卷五「廻船問屋」のなかの三十石船の説明には「大坂より上りは、一日あるひは一夜なり。（中略）伏見より下るは、半日あるひは半夜なり。賃せん一人七十二文。けだし乗合と云ふは、ただ坐することを得るのみ。故に一人分の船賃では横になるスペースが確保されるわけではなかつた。

### 58 長田<sup>ヲカ</sup>か浦の藪の近寄<sup>ル</sup>

長田か屋敷、野間のうつつみにあり。川舟にて下る。義朝  
青墓に宿し、明れば川舟にめされとあるは、今の大垣の  
川筋ならん。

△「宿」音読譜号なし。

○青墓 岐阜県大垣市北西部の地で、東山道の宿駅。平安末期から鎌倉時代にかけて、遊女のいる宿として有名であった。『平治物語』によると、平治の乱に敗れた源義朝は、青墓の長者大炊<sup>おおい</sup>との間に娘をもうけていた縁で青墓に逃れ、杭瀬川の川船に乗り、一二月二九日、長田忠致<sup>ただちか</sup>を頼って野間の内海<sup>うちみ</sup>（現愛知県知多郡南知多町）に落

ち延びたが、長田に裏切られ湯殿で謀殺された。謡曲「朝長」で、朝長の最期を語る前シテ（青墓長者の娘）の台詞に「暮れし年の八日の夜に入りて、門を荒げなく敲く音す。誰なるらんと尋ねしに、鎌田殿と仰せられしほどに門を開かすれば、武器したる人四五人内に入り給ふ。義朝御親子、鎌田金王丸とやらん、わらはを頼みおほしめす。明けなば川船にめされ、野間の内海へ御落あるべきとなり。」とある。

### 59 片足に一本鷲の立すくみ

さむき句。

○鷲（冬）

### 60 鷹匠か、む泥の股引

小溝の川柳を鷹のよせ場とす。

※「む」は誤字を見せ消ちにして右傍に補記。

○鷹匠（冬）

○鷹匠 鷹を飼い馴らして鷹狩に従事する人。王朝時代にも江戸時代にも職制があつた。生類憐みの令で知られる五代將軍綱吉は、放鷹制度を段階的に縮小して元禄六年に停止したが、八代將軍吉宗のときに復活した。○股引 細いズボン状の衣料で、後ろで打ち合わせつけ紐で結ぶ。腰の屈伸や脚の動作が自由で機能的であるため、長途の歩行や野外労働の際に用いる。ここは小溝に屈んで身を隠す



鷹匠の股引が、泥に濡れているさま。○川柳 カワヤナギ、あるいは川辺の柳。ここは後者か。○よせ場 鷹狩では、獲物となる鳥が飛び立ったところで、鷹匠が腕に据えた鷹を獲物に向かつて放つ。「よせ場」には、戦で進撃に有利な場所という意があるので、ここは鷹を放つのに適した場所の意か。あるいは単に鷹を控えさせておく場所という程度の意か。

### 61 手のひらに裸沓歩をいた、きて

御鷹飼、当座の御褒美なり。間宮、何某か当座の歌に、鶴のよはひを君そとりけるのためしあり。

△「褒美也」「何某」。注の上欄に「某」の字を補記。

○裸沓歩 ここはむき出しの一步金。一步金は縦一・五センチ、横一センチ程度の長方形で、一両の四分の一の価値である。○間宮、何某未詳。

### 62 干、兼て居る土器の時宜

○土器 釉薬をかけない素焼きの皿。食器の一つで、神饌を盛つたり、儀式で使用したりすることが多く、江戸時代には盆などの仏事で用いる。よく乾かしてから焼成する必要がある、粗い素地のものは直射日光で乾かし、緻密な素地のものは長時間かけて日陰干しされる（『世界大百科事典』）。○時宜 ちょうどよい頃合い。

### 63 直垂ヒツ、レにひんとはねたる後足ウツシロ

○直垂 袴と合わせて用いる上衣。武家の日常着であったのが、中世以降は柳営出仕の衣服となり、さらに儀式の際に長袴とともに式服として用いられるようになった。『有職装束大全』（平凡社、二〇一八年）には「江戸幕府初期の服制において直垂は、高い官位を持つ武家トップ階級の礼装と位置づけられた。その次の階級の装束は公家装束の狩衣なのであるから、直垂はそれ以上のステータスを獲得するに至ったのである」とある。○後足 太刀の足金（太刀の鞘の上部についた、帯取りの革緒を通す金具）のうち、鐔に近いものを一の足、次のものを二の足と呼び、後足はこの二の足を指す。江戸時代、武士の刀としての主流は帯に刃を上に向けて差す打刀であり、刃を下にして佩く太刀は、儀式用に装飾された糸巻太刀など、武家の権威の象徴としての役割が強かった。これも、何かの儀式の場面が想起される。

### 64 小勝が舞へば渡すツレワキ

古勝は笠屋なり。

※「小」の右に「古」と傍記。

△「古勝か舞へは」「笠屋也」

○小勝 「名古屋市史 風俗編」（名古屋市役所、一九一六年）三三三ページに、「同年（執筆者注…明暦三年（一六五七））に、都小勝と云へる女優、玄海町にて歌舞伎芝居を興行し」と見える。また西沢

一風作『御前義経記』巻三ノ四「のり合の女舞」に「そこにござるお女郎は女舞の小勝様じや。年に一度づ、名古屋へ芝居しにござる。」とある。また注に言及されている笠屋は、幸若舞から派生して女舞に勢力を張った一流で、のち歌舞伎に吸収された。○ツレワキ 幸若舞のツレとワキ。ここの「渡す」は、小勝が舞う段になると、ツレとワキは退いて交代するという意。ただし、『新日本古典文学大系59 舞の本』(岩波書店、一九九四年)の解説では、幸若・大頭・笠屋を幸若舞の三流とする『和漢三才図会』の記事を紹介しつつ、笠屋は独立した一流ではなく、大頭流の傘下にあつてワキを勤めた家であると推定されている。

三ウ

65 かこふたる筵をもれて日の移<sup>リ</sup>

小芝居。

○日の移<sup>リ</sup> 時間とともに太陽の位置が動いて、筵から差し込む日差しが変わること。○小芝居 官許の大劇場の芝居(大芝居)以外の芝居。大芝居が常設の劇場で恒常的な興行を行うことを認められたのに対し、小芝居は小屋掛けを原則とし、興行の日数も限られた。なお、近世初期の洛中洛外図には、竹矢来に筵を引きめぐらせた舞台で芝居が行われるさまが描かれている。

66 饅頭持つて寝たる乳呑<sup>ミ</sup>子

筵目の日さし、顔にかゝれば、はな紙、手拭を着せる。

○はな紙 懐中して鼻をかんだりするのに用いる紙。江戸時代には、薄く小さく漉いた肌触りのよい紙が、広く庶民の間で用いられた。

67 火をこふて灸する跡の水脹<sup>ツゲレ</sup>

小児の灸治。

△「小児ノ」

○小児の灸治 子どもの肌は弱いので、灸の熱で水ぶくれができやすい。

68 入湯のふちに涼む垢の間

○入湯 桶の中に入らる湯。「入湯のふち」は、その風呂桶の縁。○垢の間 洗い場で垢を落としもらう間。垢をかいてもらった後、灸の蓋をしもらう。

69 出女の覆輪黒き爪はつれ

○出女 宿場にいた客引きの女。多くは売春をした。○覆輪 衣服の袖口などを、別の布で細くふちどつたもの。ここは袖覆輪で、袖口がすり切れるのを防ぐためにしている。○爪はつれ 身のこなしのこと、あるいは手足の先の部分。ここは後者で、袖口が黒くなった出女の手先に注目する。

70 給仕の櫃をどつたりと置

食の見せかけは旅籠屋の習ひ、必小盛にもる。

○どつたり 重そうなさま。飯をたくさん炊いているように見せかけて、実際には少なく盛るという手口。

71 水くさき寺の荒和布の棚祭

棚祭は盆なり。

△「盆也」

◎棚祭（秋）

○水くさき 水分が多すぎて味の薄いさま。塩気が足りず、水っばいさま。前句の見かけ倒しのさまに通じる。○荒和布 あらめ。昆布に似た海藻の一種で煮て食べる。ここは盆の法会の後の精進料理の一品。『毛吹草』に五月、『俳諧をだまき』『誹諧新式』に六月とあるが、ここは秋の句。○棚祭 注にある通り、七月の盂蘭盆のこと。祖先の霊を迎えるために供物をのせる棚を盆棚・魂棚・精霊棚・先祖棚などと呼び、ここに位牌を安置する。

72 鐘に抱つく秋の夕蟬

淋しき句。

◎秋の夕蟬（秋）

○夕蟬 夕方に鳴く蟬。鳴き声ではなく、鐘にしがみつく姿をとらえた点に、秋のさびしさが感じられる。

73 暮かゝる松をすかして峯の月

◎月（月）

74 糸一すしに冬枯の瀧

水かれをいふ。

△「枯」ルビなし。

◎冬枯（冬）

○冬枯 冬になると水源が氷に閉ざされたり、湧水が積雪で消えたりして水かさが減る。草木の枯れ果てたさびしい冬景色のなか、水量が少なくなり細くなった滝のさまをとらえた。

75 漫々とみえた世界は雪降て

◎雪（冬）

○漫々 遠く広々としたさま。前句の山から細く流れ落ちる冬の滝から、雪の降りしきる平野に視線を移した。

76 矢田野の果は越の田畑

矢田野、越前にあり。ちいさき野なり。

△「あり」野也

○矢田野 『万葉集』では、現在の奈良県大和郡山形市矢田町にあった野をいうが、平安時代以降は『八雲御抄』をはじめ、福井県敦賀市南部にある有乳山ありちやまのふもと、越前の歌枕と理解している。注では「ち

いさぎ野」とされるが、「矢田の広野」とも詠まれる。歌枕である矢田野の末は、越の国の田畑に続いていると興じたもの。○越 越前・越中・越後三国の総称。

### 77 面白う花は散れとも帰る雁

越路のあしらひ。

△「ちれとも」「あしらひ」

◎花は散・帰る雁(春)

○帰る雁 春になり北方に帰って行く雁。○越路 前句の越と同じ。

○あしらひ ここは、前句の「越」にふさわしいものとして、付句に「帰る雁」を配したということ。

### 78 空は長閑に中の陽炎

中の陽炎は暮春にあり。世話に目星の花の散といふは是なり。

△「花の崩」「是也」

◎長閑・陽炎(春)

○中の陽炎 「中」は「宙」と同義で、空中の意。「陽炎」は、日光によって地表近くの空気が熱せられて密度分布にむらができ、そこを通る光が不規則に屈折することによってゆらめいて見えるもの。春の晴れた日に見られることが多い。○目星の花の散 目がかすみ、星のようなものがちらついて見えること。俳諧では、疲労や空腹に

よる目のかすみ詠まれることも多いが、『類船集』には「ちらめく」の付合語として「螢火 糸遊 目ぼしの花」が挙げられ、「見る人の目星の花か螢の火 交云」(『玉海集』)などと詠まれることから、必ずしも疲労・空腹を意識しない。

名

### 79 門跡の瓦の継目雪消て

東西本願寺の御堂。

◎雪消て(春)

○門跡 一般に皇族などが出家して居住する特定の寺格の寺院やその住職。また特に准門跡本願寺とその管長を門跡・御門跡と呼び、ここは後者。室町時代、本願寺はたびたび門跡の寺格を望み、永祿二年(一五五九)に認められる。しかし、秀吉の命により京都に移転し、第一一世宗主顕如没後の後継問題を巡って東西本願寺が分立すると、京都の諸門跡寺院から本願寺の門跡の資格に異論が唱えられ、靈元院政下の元祿一三年頃に、東西本願寺を諸門跡の最後尾、准門跡の格とすることに定まったという(太田光俊「本願寺」「門跡成」と「准門跡」本願寺』『中世の門跡と公武権力』戎光祥出版、二〇一七年)。

### 80 鶯かかけ行台の音信

京の句。あほうの小者、あくんで出替を待つ。

○鳶 ワシタカ科の鳥で、全長六〇〜六五センチメートル。腐った肉を好み、魚のあらやネズミの死体などを見つけると、翼を左右に傾けて急降下して足でつかむ。海岸から山地の開けた所に住み、人家に近い所にも現れる。○台の音信 「音信」は進物、「台」は食物をのせるもので、ここは台の上ののせておいた進物の食べ物を、鳶がさらっていくさま。○小者 下級の男性奉公人。「あほうの小者」は愚かな小者、愚かな者に使われる小者、両方の意に解釈できるが、ここは前者。○あくんで もてあましてうんざりする。

### 81 穴あけて木遣を覗<sup>ヤリ</sup>菰<sup>コモ</sup>構<sup>モ</sup>ひ

○木遣 重い材木などを運ぶ際、多人数で音頭をとりながら運ぶこと。またその人。特に材木の上にあがって音頭をとる人という場合もある。○菰構ひ 熟した語ではない。菰囲のことか。一句は菰に指で穴をあけ、外の木遣の様子をうかがうさま。前句の小者が行いそうなことを付けた。ただし、小者は前句の注の中にか出ていないので、かなり飛躍した付け方といえる。

### 82 袷に交る卯月帷子

普請場の句。

◎袷・卯月帷子（夏）

○袷 表布と裏布とを二枚あわせて一枚のように仕立てた裏地付きの衣服で、綿の入らないもの。ひとえ、綿入れに対していう。○卯

月帷子 近世には、陰暦四月一日に綿入れを脱いで袷となり、五月五日に帷子にかえる風習があった。帷子は麻、木綿、絹で仕立てたひとえ物。ここは、四月の時点ではやくも帷子姿の人足が混じっていることをいう。○普請場 建築現場や工事現場。

### 83 打つけて直に茶を干<sup>ス</sup>勢田の橋

宇治・田原・信楽のうつりにて、勢多・膳所、茶をする。是を天<sup>てん</sup>道<sup>だう</sup>干<sup>かん</sup>といふ。

△「宇治宇治」と二回繰り返し記す。「せた・膳所」

◎句意から夏。

○直に ここは筵などを敷かず、じかに干すこと。橋の上で茶を干すのは、遮蔽物がなく日光がよく当たるため。○勢田の橋 琵琶湖から瀬田川が流れ出るあたりに架けられた橋。三橋の一つで歌枕。織田信長によつて、現在の中洲を渡すための大橋と小橋が造られ、大規模で長大な橋であることから瀬田の長橋とも呼ばれる。近江八景「瀬田の夕照」の中心的景物。○田原 山城国綴喜郡田原郷（京都府綴喜郡宇治田原町）。宇治の南、伊賀に通じる丘陵地帯にあつて霧が多く、茶の栽培に適する。○信楽 近江国甲賀郡信楽（滋賀県甲賀市信楽町）。滋賀県南部に位置する。信楽焼の産地として有名なほか、茶の産地としても知られる。○勢田・膳所 『近江輿地志略』（弘文堂書店、一九七六年）巻九八「土産第二 栗太郎」の「永泉茶」の項に、「総て近江一國茶園多し。甲賀・愛知・栗太郎の諸郡の茶園

を持つ者、勢多・膳所に来て茶をうる。加賀・越前の者も亦、此所

に来て茶を買ふ。今按ずるに、此国茶ある事久し(下略)」とあるが、

本句によれば勢多や膳所でも茶を製したことがうかがえる。○天、道

干 日光に当てること。路上に品物を並べて商うことも天道干とい

うが、『守貞謾稿』巻五に「乾し見世・天道ほし 京坂にてほし見世

と云ふ。江戸にててんどうほしと云ふ。路上に蓆を敷き、諸物をな

らべ商ふを云ふ。その品定りこれなしといへども、古道具を専らと

す。あるひは古書籍」とあるように、商品は古道具や書籍の場合が

多かつたようである。

#### 84 白い汗かく膳所の馬乗

橋の直干、馬乗に余情あり。

△「直」<sup>ジカ</sup>

◎汗(夏)

○白い汗 白汗。白い玉のような汗。○馬乗 馬に乗った者。○橋

の直干 前句の茶の直干を指す。

#### 85 腰に巻ク羽織に風の吹たまり

○羽織 着物の上に着る、腰ほどの丈の胸もとを合わせない衣。乗

馬用には、背縫いの下半分を縫い合わせないで裂けたままの形にし

た割羽織を用いた。なお、羽織の背の下部を縫わないで残してある

裂け目のことも馬乗といい、本句で羽織を導き出したのは前句の馬

乗をその意に見変えた可能性も考えられる。

#### 86 傘なし走る近付の門

雨のふり出也。走れば羽織の背中つき、馬乗の腰巻の風

を持たるに似たり。

△「近付キ」「ふり出し」

○近付 親しくなること、知りあうこと。急に雨が降り始めたが傘

がないので軒下に駆け込むと、同じく雨宿りしている人がおり、そ

こで互いに親しくなるといった光景を詠むか。あるいは急な雨に知

り合いの家の門口に駆け込むさまか。○腰巻 腰巻羽織の略で、羽

織の裾をからげて腰に巻きつけること、またその姿をいう。浮世草

子や歌謡等における用例から、伊達な風であったことがうかがえる。

#### 87 四ツ辻に先をわらる、供の者

江戸ノ句。

○四ツ辻 二つの道が十字形に交差した所。四つ角。○先をわら

る、ここは主人に後れた従者が四ツ辻にぶつかり、主人はどちら

に行つたのだろうかと迷うさま。

#### 88 又若やきて犬の御法度

○若やきて にぎやかになる。○犬の御法度 生類憐みの令。『国史

大辞典』によると、生類憐みの令の施行範囲は主として江戸および

幕領であった。江戸の市中を描いた前句から生類憐みの令を連想したか。

89 大寺の住持不義して公儀沙汰

犬にて顛れたり。

△「顛」

○不義 人の道にはずれたことや、男女の道にはずれた関係。○公儀沙汰 おおやけの沙汰、裁判沙汰。

90 寄りを立たる那波屋一党

宗門を大切とするは都の風俗。

※「一」は「へ」の上に重ね書き。

△「一」ルビなし。

○寄り 寄り合い。○那波屋 『長者教』に三長者の一人として登場する京都の豪商で三井家の祖。初代那波屋九郎右衛門は、京都で両替商を営んだ父恒有の財産を第十郎右衛門と分けて相続し、ともに元禄時代における京都第一の富商であった。『町人考見録』上巻「那波屋九郎左衛門」の項には「先祖は、播州那波より出る。何事やらん、公事の願にて所を立退き、江戸へ下り、御城の女中衆の息女を娶りて、其縁より申込、裁許に理を得候。」(『徳川時代商業叢書 第一』名著刊行会、一九六五年)と見える。神沢杜口(一七一〇〜一七九五)の随筆『翁草』(『日本随筆大成第三期第一一巻』日本随筆大成刊行会、

一九三一年)巻六三には「那波屋九郎右衛門(中略)惣領九郎左衛門、後に寿順、第十右衛門、後正斎と号す。両家一旦は繁昌せしが、正斎家は先年潰、九郎右衛門方も段々衰微して諸家の大名より滞銀の訟有之により、先年公儀より閉門仰付られ、今於其分に蟄居す」と見え、次第に身代が薄くなっていたことが記される。○宗門 宗派。また出家、宗門の人。

91 むかしより廿日の月か遅ふ出て

付ぬ句なり。やり句也。寄合の戻り、辻の別れ途までの

高咄。

△「付ぬ句也」

◎廿日の月(秋)

○廿日の月 二〇日に出る月。月がまだ空にあるうちに夜明けとなる。○高咄 大きな声で話をする事。

92 彼岸こほれの中稲色つく

◎中稲(秋)

○彼岸 春分・秋分前後の一週間。現在は、春分・秋分を中日とした前後三日ずつをあわせた七日間をいうが、宣明・貞享暦(貞観四年(八六二)〜宝暦四年(一七五五))では、春分・秋分の翌々日が彼岸の入りであった。『増山井』「彼岸」に「是も春也。後の彼岸は秋也。」とあるが、ここは秋の句。○彼岸こほれ 彼岸に収穫されな

かったもの。○中稻 早稲と晩稲との中間に成熟する稲の品種の総称。九月上旬に穂を出し、一〇月中旬・下旬に収穫する。

名ウ

93 蜻蛉カケロウについて小鳥の渡りかけ

又小鳥について鷹渡るなり。

△「也」

◎蜻蛉・小鳥の渡りり（秋）

○蜻蛉 ○小鳥の渡り 小形の渡鳥が飛来する。『滑稽雑談』巻二六「八月之部下」「小鳥渡・色鳥」の項に「御傘曰、小鳥渡る、秋也。小鳥と計は雑也。（中略）按に、近頃、小鳥と計も秋に用ゆる。句作によるべし」とある。○鷹渡 秋になり、鷹が北方から日本に渡ってくる。近世前期諸歳時記には載らない。

94 又此度も見やる鎌倉

よろふくとして、此度もよらす。

○見やる その方へ視線をやる。

95 金持は一生金につかはれて

江戸だな算用聞に下る人。

△「江戸棚の算用」

○江戸だな 江戸にある出店。上方の有力な商人の多くは江戸に見

世を出した。○算用 勘定。収支を決算すること。

96 明日は七日で剉む斎非時

藤や市兵衛も道中に死ぬる。

△「藤屋」「道中にて」

○剉む 刻む。○斎非時 寺院の食事。また法事などで僧に供する食事。ここは七日目ごとの法事の場面なので後者。○藤や市兵衛 藤屋市兵衛。藤市。寛文（一六六一〜七三）・延宝（一六七三〜八一）頃の京の商人。『町人考見録』中巻に、長崎商いによって一代で二千貫目の分限となったことが見える。『好色一代男』に言及されるほか、『日本永代蔵』巻二ノ一「世界の借家大将」に多大な財産を有しながら借屋で暮したことなど、徹底した合理的節約ぶりが描かれる。ただし、旅中に没したことについては未詳。

97 おもひ寝の蒲団に乳汁チのはりこほれ

子を失ひたる母の句。

△自注なし。

○おもひ寝 物を思いながら寝ること。特に恋しい人のことを思いながら寝る場合に用いるが、ここは失った幼い我が子を思いながら眠る母のさまを詠む。



98 稚馴ワサナナシもかれワサナナシの夢

※「稚馴染」とあつた「染」を見せ消ちにする。林篁筆写専宗寺旧蔵  
影写本は「稚馴染」と「染」の字がある。

◎かれワサナナシの夢(恋)

○稚馴染 幼少時になれ親しんでいた人、また幼少時からずつとなれ親しんでいる人。○かれワサナナシ 人の行き来や手紙、歌のやりとりが途絶えがちなさま。特に男女の間柄が疎くなつていゝさま。ここは夢に出てくることさえ稀になつたという句意。

99 二階から見れば花咲ハナ西東

離別して親里に帰る。納戸の二階住居、いとあはれなり。

△「也」

◎花(春)

○納戸 民家の北側など奥まつた所にある部屋で、衣服や調度、貴重品などを収納したり、主人夫婦の寝間や、老婆・主婦・娘の居間として使われたりした。○二階住居 京都の町家には、「厨子二階」と呼ばれる、天井の高さが低い屋根裏空間をもつものが多く作られ、この中二階部分は物置や使用人の寝間として使われた。ここは、そうした物置部屋に、配偶者と離縁して親元に戻ってきた子が住まうことになつた場面。なお、『世界大百科事典』の「寝間」の項目にも「日本の家屋では、主屋に専用寝間は一つだけの場合が多く、ここには家長夫婦と幼児のみが寝起きし、青年男女は別棟あるいは土間の

中二階などの簡単なつくりの(部屋)を寝間とし」とある。

100 八坂の塔は春雨の雲

◎春雨(春)

○春雨 『三冊子』に「春雨はをやみなく、いつまでもふりつゞく様にする。三月をいふ。二月すゑよりも用る也。正月・二月はじめを春の雨と也。」と、「春雨」と「春の雨」を使い分けている。○八坂の塔 京都市東山区八坂上町にある靈応山法観寺の通称。寺伝によると、聖徳太子が如意輪観音の教示により、五重塔を建てて仏舍利を納めたとされる。応仁の乱のあと急速に衰微し、江戸時代には五重塔、太子堂、薬師堂が残るのみとなつた。なお、五重塔については、『日本歴史地名大系 京都市』に「五重塔内部の二つの階段は相当摩滅しており、元和修復以後、江戸期を通じて観光客に開放されたことを推測させる。人々は眼下に展望する京都市中の景観を楽しんでのであろう。」と記される。また『都名所図会』(安永九年刊)には「八坂の踊は、文月なかばより此さとの遊君、はでなるゆかたに彦惣頭巾、野郎ぼうしなどかづき、目さむるばかりにけはひして、塔のまへに輪をなしおどる也。ゆき、の人、見物せんと木戸口よりはいりて、かれをこれと興じ、ついに一夜妻の嫌となしぬ。寛保・延享の頃に待りしが、今は絶てなし。」と見える。